

アリウム“丹頂”の開花と球根冷蔵期間及び栽培温度

農業研究センター 農産園芸研究所 花き部

研究のねらい

アリウム“丹頂”は、特産花きとして生産が増えているが、出荷期が集中しており、作期の拡大が望まれている。そこで、促成栽培技術確立に取り組み、8月の球根冷蔵と長日処理が開花促進に効果があることを明らかにしたが、球根冷蔵期間と栽培温度について検討する。

研究の成果

2.5～4.0gの球根を用い、8月の湿潤冷蔵を各々の期間行った後、10月29日に定植した。球根冷蔵期間については最低8℃下で栽培した。

1. 花芽分化は、球根冷蔵期間が長いほど早く、その後の花芽の発達も進んでいるが、無冷蔵球では花芽分化はかなり遅れる。
2. 開花は、球根冷蔵期間が長いほど早くなり、無冷蔵球では遅れる。また、無冷蔵球は自然日長下では開花率が低い。
3. 切花重や小花数は、長日下では冷蔵期間が長くなるほど減少するが、自然日長下では冷蔵期間が長くなるほど増加する。
4. 栽培温度が最低12℃では、開花は著しく早進化し、最低8℃と最低5℃では、ほとんど差がない。花梗長、切花重、小花数は栽培温度による差がほとんど無い。
5. これらのことから、球根が十分低温に遭遇した後なら長日下では直ちに花芽分化を始めるが、自然日長下や低温遭遇不足では花芽分化が遅れる。開花促進のためには、球根冷蔵期間は長いほど効果的で、栽培にはある程度の加温が必要である。
6. 事例として、10週間冷蔵、長日処理、12℃の加温栽培で開花は、2月下旬であったが、4月開花に比べ、切花重や小花数等の切花品質が劣る。

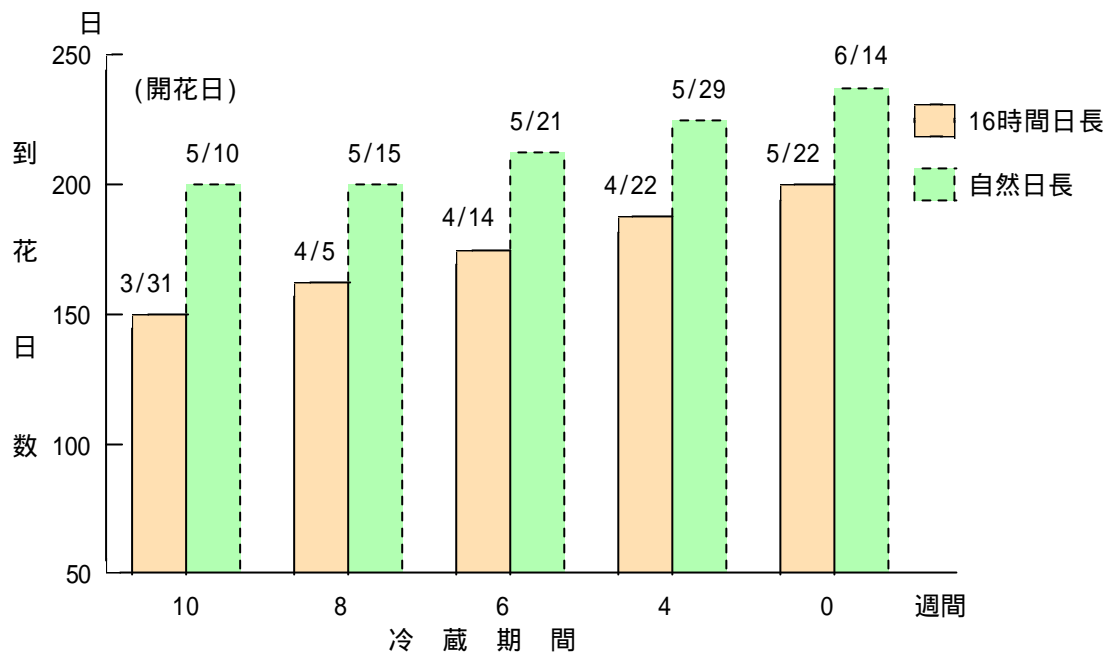


図1 到花日数に及ぼす球根冷蔵期間と日長の影響

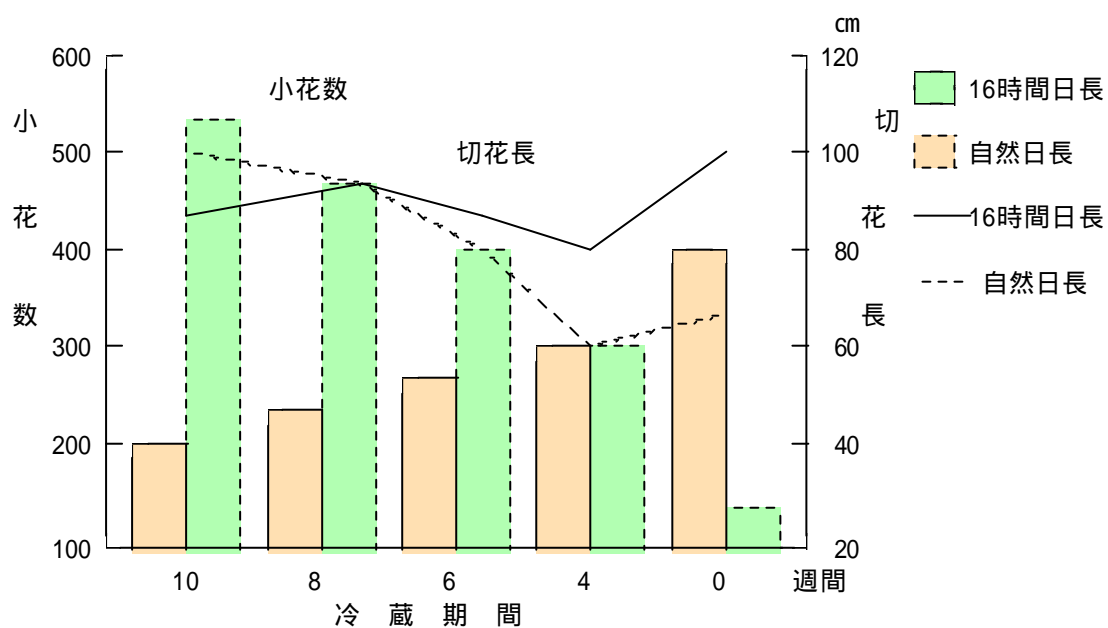


図2 小花数と切花長に及ぼす球根冷蔵期間と日長の影響

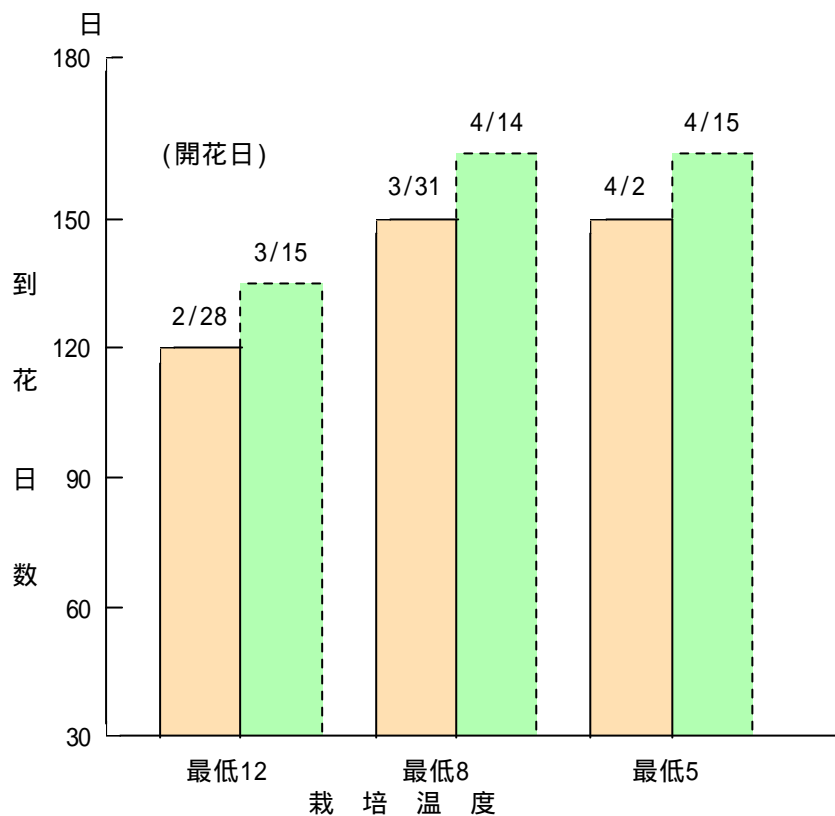


図3 到花日数に及ぼす栽培温度の影響

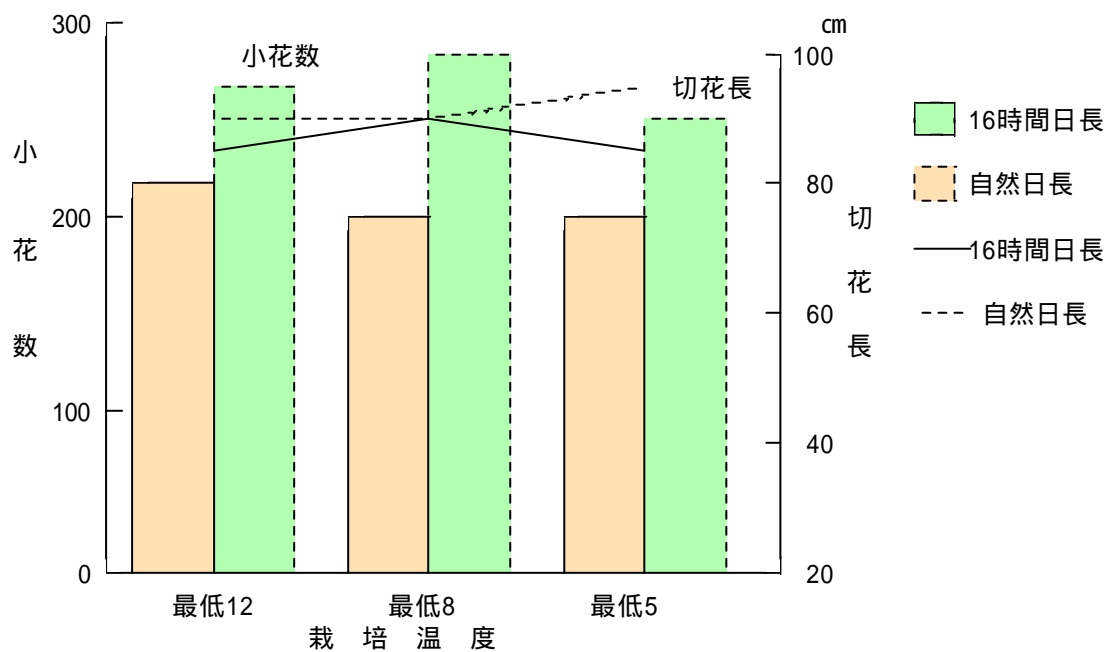


図4 小花数と切花長に及ぼす栽培温度の影響